

書誌
年鑑

2024

有木太一
編

目次

凡例	vi
この本の使い方	viii
書誌目録	1
あ 3	
か 77	
さ 182	
た 292	
な 358	
は 384	
ま 444	
や 471	
ら 484	
わ 502	
書誌解説	505

凡 例

I 収録範囲

1 期間

日本で発表された各種の文献目録すなわち書誌のうち、2023年1月から12月までに発表されたもの、およびそれ以前の発表で『書誌年鑑』に掲載できなかったもの、合計9,532点(キーワード件数)と書誌解説12点を収録した。

2 内容

書誌は文献のリストなので、博物館などが編集・発行する動植物・鉱物の目録はもちろん対象外であるが、書誌の一分野である文書目録も対象外としている。近年地方・中央で多くの文書館が開設され、中世・近世・近現代の文書が多数発掘・保存される情勢となったので、本書では、文書目録の収集や目録化は、新しく大きく形成されてきた文書館界に任せるのが妥当だと考えている。本書収録の書誌は、文献探索上で書誌が必要とされる、人文科学・社会科学・生活科学の範囲のものにおおむね限られている。

3 採録

本書の編者が新刊の図書資料・雑誌から日常採録した書誌に、日外アソシエーツにおいて収集したデータから編者が選択・現物確認した書誌を加えている。

II 配列方法

1 「書誌目録」では、上記の書誌記述から件名・人名・地名・誌名などのキーワードを選定し、その五十音順に配列している。

2 「書誌解説」では、本書収録の書誌から、主題・形式などに特色のあるものを選択した。配列は解説者名の五十音順とし、同一解説者内ではキーワードの五十音順とした。

3 キーワード五十音順の配列においては、濁音・半濁音は清音とし、ヴ→ウ、ヂ→シ、ヅ→スとした。促音・拗音も直音とし、長音符(音引き)はアの前とした。

III 記述形式

1 キーワード

第1キーワードはゴシック体で表示。第2キーワードは「⇔」の後に続けて明朝体で表示し、同一記述を第2キーワードの位置にも副出した。

2 図書単行書誌

『書名 副書名 巻次』 発行所名 ☆
(著編者名) 発行年月 総頁数 判型

* 図書単行書誌では、書誌表示を☆印とした。

* 発行所名欄は下記のように省略した(以下3、4でも同様)。

○○大学 → ○○大 ○○短期大学 → ○○短大

○○教育委員会 → ○○教委

3 図書収録書誌

『書名 副書名』(著編者名) 発行所名 書誌表示
<収録書誌編者名> 発行年月 始-終頁

4 雑誌掲載書誌

「誌名 巻・号=通号」 発行所名 書誌表示
<掲載書誌編者名> 発行年月 始-終頁

* 雑誌全体の編者名(団体・個人)は省略した。

5 書誌表示

参考文献・引用文献・著書目録・著作目録・文献目録・業績・年譜など。長いものは短縮した。

6 頁記述

p: page f: front b: back r: random

pf: 前付部分に書誌があって、頁付がない場合。

pb: 後付部分に書誌があって、頁付がない場合。

pr: 前付・後付以外の部分に書誌があって、頁付がない場合。

p1-3f: 前付部分に書誌があって、頁付がある場合。

p1-3b: 後付部分に書誌があって、頁付がある場合。

pr: 各章節末に書誌がある場合。

* 連載ものは初回の掲載頁のみを記載した。

この本の使い方

1. アペリティフ

すでにご存じとは思いますが、書誌とは何であるかをまず確認しておこう。ざっくり言えば、書誌とは「本の選手名鑑」である。

野球やサッカーなどのプロスポーツ、あるいはAKBや坂道などアイドルグループには、「選手名鑑」「メンバー名鑑」といった本（ないし冊子）がある。運営会社など興行側でつくる公式本、一般の出版社や個人がつくる非公式本の別を問わず、スポーツなら各チームの選手について、アイドルならそのグループのタレントについて、プロフィールが紹介されている。単独で1冊にまとめられるほか、雑誌の特集記事や付録になったり、一部公営ギャンブルでは無料配布されることもある。

書誌はこれらと似ている。選手名鑑には、あるチームが試合で勝利することを目標として集められた選手の、氏名・出身地・生年月日・背番号・ポジション・身長・体重といった情報が出ている。これと同じように、書誌には、あるテーマを究明することを目標として集められた本の、書名・著者名・刊行年月・出版者（社）といった項目が掲載されている。チーム＝テーマに則って、選手＝本が紹介されている。書誌によって、あるテーマを明らかにするための本を知ることができる。

当『書誌年鑑』は、「書誌」というテーマに基づいて、書誌＝本の選手名鑑を集めた本。このことから“書誌の書誌”と呼ばれている。これにより、どんな「本の選手名鑑」が出ているかがわかり、あるテーマについて知りたい／調べたいと思った時に、どの本を読んだらよいかの指針となるのである。こうした用途を補うものとして、図書館にはOPAC（オンライン蔵書目録）が普及しているが、OPACではその館で所蔵しているものしか検索できないし、また隣接領域の文献がたまたま目に入るといことも生じないので、プラスアルファの効果は生まれにくい。

大学に入学すると、学術論文やレポートの作成についてオリエンテー

ションを受けると思う。そこでよく言われているのが、学術論文の脚注から芋づる式に参考文献を探し求めるというやり方である。ところが、この方法はかなり労力を要する。脚注には参考文献以外の内容も含まれており、文献の書誌情報だけをまとめようとしても余計なノイズが多いからだ。そもそも「論文」にどのように行き当たればよいのか。

そういう時に、まず『書誌年鑑』を手にしていただきたい。書誌＝文献一覧がテーマ別に多数並んでいる。読者は文献を探索する際にまず本書を使うことで、芋づるをたぐり寄せるエネルギーが軽減できるのである。

というわけで、当『書誌年鑑』は、単に物事を知る・調べることから一歩進んで、よりクリエイティブに、イノベーティブな論文やレポートを生産するための本であると言える。

2. プラ

『木綿のハンカチーフ』（太田裕美）や『ルビーの指環』（寺尾聰）など、数々のヒット曲で昭和・平成の時代を風靡した、作詞家の松本隆氏について調べてみよう。

本書『書誌年鑑2024』で、見出し語「松本隆」を探してみても、残念ながら見つからない。もちろん、そこで諦めてしまっただけでは調べごとはできない。こういう場合、松本氏と関連のありそうな他のキーワードを探すことで、局面を打開できる可能性がある。松本氏が作詞家になる前に参加していたロックバンド「はっぴいえんど」を知っていれば、本年版392頁に見出し語「はっぴいえんど」が見つかるのだが、予備知識がなければ厳しいかもしれない。そこで、関連ありそうな単語として「流行歌」を本年版で引いてみよう。489頁に7件見つかる。さらに、本書の過去の版をさかのぼって探してみると、『2022』の431頁に、キーワード「松本隆」が1件発見された。

今ここで出てきた合計9冊の本のうち、任意の数冊を読むだけでも、松本隆氏についてそれなりの知識は得られるのであるが、それでは本書を「使いこなした」とは言えない。本書で検索しても、書誌が掲載され

ていない本の情報は抜け落ちているからである。テーマ別にどんな文献が出ているかを知りたいだけなら、『日本人名図書目録』などテーマ別文献索引、あるいは図書館 OPAC のキーワード検索を使えば足りる。

本書の真の出番は、その先にある。本書は“書誌の書誌”であるので、今出てきた9冊の本には、必ず書誌、つまり文献一覧が掲載されている。1冊手に取ってみると、そこにはその本を書くために著者が使った本が、参考文献一覧という形でズラリと並んでいる。9冊それぞれの書誌に掲載されている文献を総合し、自分が読まねばならない本（単行書だけでなく雑誌記事や論文なども含む）をリストアップする。これが、文献調査の始まりである。

リストアップした文献がまだ少ないと感じられた場合は、関連するキーワードを拡げて検索するほか、ひきつづき本書の過年度版を閲覧しよう。『書誌年鑑』は1982年以降毎年刊行されており、数年に一度の割で『人物書誌索引』『主題書誌索引』という2冊の蓄積版も発行されている。そちらの書誌も参照すれば、さらに多くの文献が閲覧できるハズである。昨年版『書誌年鑑2023』にキーワード「松本隆」はないが、「流行歌」は2件ある。昨年版より前では、『2022』に「松本隆」1件と「流行歌」5件、『2021』に「流行歌」のみ5件、『2020』『2019』に「流行歌」各3件、『2018』に「松本隆」1件と「流行歌」3件。これで、2017年以降に刊行された書誌は全てチェックできたことになる。なお、2021年以前は蓄積版でも検索できる。『人物書誌索引2015-2021』に「松本隆」2件、『主題書誌索引2015-2021』に「流行歌」が25件発見される。

さて、あるテーマに関して複数の書誌を検討していくと、どの書誌にも共通して掲載されている本があるのに気付く。これは、そのテーマについて調べる際に読んでおかなければ始まらない、どの著者も参照「せざるを得なかった」基本的な重要文献である。目標とするテーマについて、まずそうした本を探し出し、内容を徹底的に把握することにより、書こうとする論文に盤石な基礎が形成されることになる。

それ以外の文献は、バラエティに富んだ様々なものが掲載されている。中には、直接関係あると思えないような文献もあるが、こういった文献

はすべて、論文に枝葉を茂らせるためのものである。たとえば、『書誌年鑑2018』に『阿久悠と松本隆』という本が出ている。この本の書誌には、松本氏の同業者、阿久悠氏に関する文献も多数収載されていると予想される。『シンデレラ・ハネムーン』『もしもピアノが弾けたなら』などで有名な阿久氏について知ることは、松本氏を把握するうえで有力な材料になるハズである。たとえばまた、『木綿のハンカチーフ』の時代背景を語るには、同曲ディレクターの出身地である筑豊について知る必要がある。となれば、福岡県の地理や歴史に関する本がもしあれば、そこに関していえば松本氏に関連した本ということになる。

あとは、書誌で見つけた文献を徹底的に調べ上げれば、力作の出現は近い。ここまで来れば、あなたはもはや松本隆氏の“第一人者”といえよう。

3. デセール

残念ながら、本書の存在はあまり知られていないようだ。この原稿を書く際、いろいろな大学の「論文の書き方」のようなwebページを複数見てみたが、本書に触れているものを発見することはできなかった。しかし、逆に言うと、存在の知られていない本書を活用することで、あなたはライバルに一步も二歩も差をつけることができるのである。

本書のような「書誌の書誌」は、欧米など諸外国では、国立図書館や最有力図書館学会の編集物であることが多いようだ。一方日本では、一介の個人編集者が細々と作り、それを志のある出版社が採算を度外視して刊行しているのが現状である。しかし今後、日本の学術や文化、とりわけ人文・社会分野においては、「書誌の書誌」を一瞥すれば、到達水準の高さが一目で読み取れるようになるであろう。過去の編者は、そう信じて本書を毎年編集してきたし、私もそのつもりでいる。末永くご愛顧を賜りたい。(有木太一)

【あ】

アーカムハウス	「幻想と怪奇 13」	新紀元社 2023.3	刊行物一覧 p237-246	あ
アーカムハウス	『アーカム・ハウスの本』(三門優祐ほか)	書肆盛林堂 2023.3	☆ 211p A5	
アーサー, R.	『ガラスの橋—ロバート・アーサー自選傑作集』(R. アーサー)〈小林晋〉	扶桑社 2023.7	著作リスト p364-366	
『アーサー王伝説』	『聖杯の神話—アーサー王神話の魔法と謎』(J. キャンベル)	人文書院 2023.9	参考文献 p328-331	
アートドキュメンテーション	『アート・ドキュメンテーション研究 31』〈JADS文献情報委員会〉	アート・ドキュメンテーション学会 2023.5	文献目録 p63-70	
アーノルド, H.	『アーノルド元帥と米陸軍航空軍』(源田孝)	芙蓉書房出版 2023.5	参考文献 p265-270	
「R&D神戸製鋼技報」	「R&D神戸製鋼技報 72.1=248」	神戸製鋼所技術開発本部 2023.6	文献一覧表 p137-138	
アールデコ ⇨庭園	『装飾の庭—朝香宮邸のアール・デコと庭園芸術』(B. テンベルほか)〈大木香奈〉	東京都庭園美術館 [2023]	参考文献 p204-205	
アールデコ	『アール・デコ—戦間期フランスの求めた近代建築』(三田村哲哉)	中央公論美術出版 2023.2	参考文献 p484-475	
RPG	『国産RPGクロニクル—ゲームはどう物語を描いてきたのか?』(渡辺範明)	イースト・プレス 2023.6	参考文献 p334-335	
アーレント, H.	『世界への信頼と希望、そして愛—アーレント『活動的生』から考える』(林大地)	みずぎ書房 2023.12	参考文献 p18-35b	
艾未未	『艾未未アート「戦略」—アートが「政治」を超えるとき』(宮本真左美)	水声社 2023.6	参考文献 p527-532	
愛国婦人会 ⇨朝鮮	『植民地朝鮮の愛国婦人会—在朝日本人女性と植民地支配』(広瀬玲子)	有志舎 2023.12	参考文献史料一覧 p207-213	
藍澤南城	『藍澤南城の学問と教育』(村山敬三)	汲古書院 2023.4	参考資料 p553-554	
アイスランド ⇨議会政治	『危機の時代の市民と政党—アイスランドのラディカル・デモクラシー』(塩田潤)	明石書店 2023.2	参考文献一覧 p291-274	
「愛知県環境調査センター所報」	「愛知県環境調査センター所報 50」	愛知県環境調査センター 2023.3	掲載論文一覧 p87-90	
愛知県史 ⇨教育	『愛知県教育史年表 昭和61年—平成17年』	愛知県総合教育センター 2023.3	基礎資料一覧 p727-728	

愛知県図書館	『愛知県図書館開館30周年記念誌』	愛知県図書館 2023.3	参考文献 p106-107
アイデンティティ ⇔ウェールズ	『防衛大学紀要 人文科学分冊 126』(小林麻衣子)	防衛大 2023.3	作品一覧 p5-22
アイデンティティ	『アイデンティティ研究のための伝記分析—生涯発達の質的心理学』(大野久)	福村出版 2023.10	引用文献 pr
アイデンティティ ⇔脳	『自己の科学は可能か—心身脳問題として考える』(田中彰吾)	新曜社 2023.12	引用文献 p7-14b
アイヌ	『アイヌの時空を旅する—奪われぬ魂』(小坂洋右)	藤原書店 2023.1	参考文献 p336-345
アイヌ	『アイヌ民族と日本人—東アジアのなかの蝦夷地』(菊池勇夫)	吉川弘文館 2023.3	参考文献 p256-268
アイヌ ⇔千島列島	『北千島アイヌ民族の記録—クリル人の歴史を尋ねて』(加藤好男)	藤田印刷エクセレントブックス 2023.4	収録文献目録 p373-382
アイヌ ⇔漁業権	『海のアイヌの丸木舟—ラポロアイヌネイションの闘い』(青柳絵梨子)	寿郎社 2023.6	参考文献資料 p356-358
アイヌ	『北方民族の編むと織る—北海道立北方民族博物館第38回特別展図録』	北海道立北方民族博物館 2023.7	参考文献 pr
アイヌ	『AINU ART—モレウのうた— Contemporary AINU ART and Crafts 2023-2024』(北海道立近代美術館ほか)	一宮市三岸節子記念美術館 2023.9	参考文献 p92-93
アイヌ	『ウポボイまるごとガイド—ウポボイ アエエラマン カンピソシ』	北海道新聞社 2023.10	学書書籍 p121-124
アイヌ語 ⇔ユーカラ	『カムイユカラを聞いてアイヌ語を学ぶ 新装』(中川裕ほか)	白水社 2023.4	さらに学習するために p219-222
アイヌ文学	『エポエポアヤポーアイヌ文学読本』(トツカリ)	のんびり出版社海豹舎 2023.10	☆ 183p 15×15cm
アイヌ民族博物館 (国立)	『ウアイヌコロ コタン アカラーウポボイのことばと歴史』(国立アイヌ民族博物館)	国書刊行会 2023.3	参考文献 p199-200
アイヒマン, K. A.	『アイヒマンと日本人』(山崎雅弘)	祥伝社 2023.8	参考文献 p238-240
アイルランド文学	『イエイツ研究 53』	日本イエイツ協会事務局 2023.2	書誌 p49-56
アイルランド文学 ⇔戯曲	『現代アイルランドのドラマツルギー—複合の視点』(前波清一)	小島遊書房 2023.2	引用基礎文献 p206-212
アインシュタイン, A.	『アインシュタインのことばと人生』(新堂進)	ポプラ社 2023.1	もっと知りたい! ほか p75-69
アヴィーチー ⇔バリリング, T.	『ティム—アヴィーチー・オフィシャルバイオグラフィ』(M. ムーゼソン)	青土社 2023.7	参考文献ほか p411-423
アウグスティヌス ⇔キリスト	『アウグスティヌスのキリスト論』(浅井太郎)	サンパウロ 2023.4	文献表 p410-423

アウシュビッツ強制収容所 ⇔ホロコースト	『アウシュビッツを破壊せよ—自ら収容所に潜入した男 下』(J. フェアウエザー)	河出書房新社 2023.1	参考文献 p279-259
あおい書店	『追憶の多屋朋三氏—遺稿「彩色絵図」—熊野川 新宮 那智 勝浦 古座』(多屋朋三)	久保卓哉 2023.10	刊行書籍目録 p139-146
青木栄一	『青木栄一先生略歴・著作目録 2023年版』(編集委員会)	青木栄一先生を偲ぶ会 2023.5	☆ 85p B5
青木浩治	『甲南経済学論集 63.3・4=301・302』	甲南大 2023.3	著作目録 p10-14
青木木米	『木米—没後190年』(久保佐知恵ほか)	サントリー美術館 2023.2	参考文献 p312-315
アオミドロ	『藻類 71.3』(仲田崇志ほか)	日本藻類学会 2023.11	参考文献一覧 p170-172
青森県 ⇔産業	『ポストコロナ期にむかう青森県の産業』(今喜典)	蒼天社出版 2023.4	参考文献 pr
青森県 ⇔湖沼	『青森県の湖沼』(工藤英明ほか)	[山内重孝] 2023.7	文献資料 p188-189
青森県 ⇔遺跡・遺物	『発掘調査報告書総目録 青森県編』	奈良文化財研究所 2023.12	☆ 3, 122p A4
青森県立畜産学校	『青森県立畜産学校の明治—「富国強兵」は馬産地・三本木村に何をもたらしたか』(堀内孝)	教育史料出版会 2023.9	参考文献一覧 p261-270
青山真治	『青山真治アンフィニッシュドワークス』(樋口泰人ほか) (パンス)	河出書房新社 2023.3	(年表) p199-212
青山真治	『青山真治クロニクルズ』(樋口泰人)	リトルモア 2023.4	書籍 p770-771
赤石孝次	『経営と経済 103.1-3=300』	長崎大 2023.12	著作目録 p225-227
赤木柝平 ⇔池崎忠孝	『近代日本メディア議員列伝 6 池崎忠孝の明暗—教養主義者の大衆政治』(佐藤卓己)	創元社 2023.6	引用文献ほか p517-547
明石掃部	『史伝明石掃部 新版』(小川博毅)	吉備人出版 2023.12	引用史料および参考文献 p296-301
明石欽司	『法政研究 90.3』	九州大 2023.12	著作目録 p1-9b
明石博行	『駒大経営研究 54.3・4』	駒澤大 2023.3	業績一覧 p134-139 (354-359)
明石藩	『明石藩の世界—企画展 11 明石藩の懐事情』(明石市文化・スポーツ室歴史文化財係)	明石市立文化博物館 2023.9	参考引用文献 p73-74
赤林由雄	『三田学会雑誌 115.4』	慶應義塾経済学会 2023.1	著作 p95-96 (415-416)

釣り

『釣りの名著 50 冊—古今東西の「水辺の哲学」を読み解く 続』（世良康著）つり人社、2023.3 351p B6

魚釣りに関する本は、小説やエッセイなど作品ジャンルの違いもあるが、海か川か、川なら河口近くか溪流かといった水域の違い、そこに棲む魚の種類の違いによって千差万別であり、魚種が違えば釣り方も異なるなど多種多彩である。その名のとおり「釣り」をテーマとした 50 冊を収録した本書は、釣り雑誌『月刊つり人』（つり人社）の連載「釣本耽読」の集成である。同連載は 2014 年 6 月号から始まり、2022 年 9 月号で連載 100 回を迎えて終了した。

本書はこの連載を集成した 2 冊目となるもので、100 回の連載から 46 作品を収録し、4 本を書き下ろした。書き下ろしは、連載が 2 回にわたった本が 4 冊あるため、作品数の不足を補ったものである。2 回分を使用した以下の 4 冊、佐藤垢石『魔味談』、今西錦司『イワナとヤマメ—溪流の生態と釣り』、夢枕獏『大江戸釣客伝』、大島昌宏『九頭竜川』は、著者が特に重要と考えた 4 冊となろうか。掲載順は、正編に採用された分を除き、ほぼ雑誌掲載順。なお、続編同様の編集である正編は 2020 年 7 月に刊行され、雑誌連載から 50 作品を収録している。

B 6 判縦書き。目次と「はじめに」の後に本文、末尾には作者索引（五十音順、範囲はこの本のみ）。本文は、最初に作品名と著者名を大きな明朝体フォントで打ち出し、書誌事項と書影をあしらった後に、多くは 3 部立ての文章。末尾に、その作品の著者がグレー地の囲み記事の形で紹介され、1 作品が終了する。1 つの作品につき 7～8 頁を使用したものが大部分だが、12 頁の大作が 1 本だけある（『九頭竜川』）。これは前述の連載 2 回分作品である。

書誌事項は《昭和 52 年、講談社から刊行。平成 21 年、同社から文庫版発売》（p157）《1977 年、現代企画室から刊行の『志賀先生の台所』に所収》（p185）のように、体言止めされた文章の形式で書かれている。グレー地に白抜きの明朝体で組まれて少々見づらいのと、記述の形式が作品ごとにまちまちであるところが（一般向け書籍としては問題にならないが）書誌としては苦しい。それでも、正編では刊行年の抜けているものが多くみられたが、続編では全件で書誌情報が満たされるよう改善されている。

掲載されている作品は小説が多いが、エッセイや闘病記なども含まれる。選書はおおむね、正編で有名人著者を含むバラエティに富んだ選択、続編で渋い選択、となっているようである。続編の本文は井伏鱒二『黒い雨』から始まり、釣り作家として著名な開高健の『私の釣魚大全』、釣り好きで知られ釣り小説を多く書いた幸田露伴の『蘆声』と続く。アーネスト・ヘミングウェイもあって『二つの心臓の大きな川』である。戦後の作品が多いが、1901 年『郵便報知新聞』連載の村井玄斎『釣道楽』のような古い作品もみられる。新しいところでは、第 157

回（2017 年上半期）芥川賞受賞作である沼田真佑『影裏』、最新は 2021 年 1 月刊の戸門秀雄『川漁—越後魚野川の伝統漁と釣り』である。なお、ヘミングウェイは正編でも取り上げられており、こちらは釣り文学の代表といえる『老人と海』であって安堵した。

文章は釣歴の長いベテランらしく豊富な知識でしっかりと書かれている。著者の世良康氏は 1948 年生まれのフリーライターで、編集者や夕刊紙記者を歴任。30 代前半の 1980 年頃から釣りを始め、40 年以上のキャリアを持つ。（有木太一）

『近現代日本思想史—「知」の巨人 100 人の 200 冊』（東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター監修）平凡社 2023.2 357p 新書判

哲学者、政治家、美術史家、社会運動家、教育者、ジャーナリスト、数学者、民俗学者、文化人類学者、フェミニスト、批評家など、様々な背景をもつ 100 人の思想家の生涯と主著 2 冊を紹介した、日本の近現代思想が一望できる入門書である。東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センターは、2002 年に丸山の約 18,000 冊の蔵書とほぼ同数の雑誌、約 8,200 件の草稿類を寄贈されたことを契機に、東京女子大学比較文化研究所に附置された。同センターは、政治学者丸山の研究や資料の公開にとどまらず、近現代日本思想史をあらたな活動の柱とすることを企図し、その最初の試みとして本書が編まれた。

本書の構成は、5 つの時代区分ごとに、思想家を氏名の五十音順で並べている。区分は以下の通り。Ⅰ文明開化から日清戦争・日露戦争まで（岡倉天心・中江兆民・福澤諭吉など 21 名）Ⅱ第一次世界大戦と大正デモクラシー（西田幾多郎・平塚らいてう・柳田國男など 19 名）Ⅲモダニズム・マルクス主義・ファシズム（岡潔・北一輝・美濃部達吉など 21 名）Ⅳ敗戦から六〇年安保闘争まで（今西錦司・大塚久雄・丸山眞男など 17 名）Ⅴ高度経済成長期以降（石牟礼道子・河合隼雄・吉本隆明など 22 名）。

各章の冒頭には、その時代と思想についての概説があり、個々の思想家については、人物紹介に 1 頁、主著 2 冊の紹介に各 1 頁を使い、書名、出版社、出版年も明記される。主著は、現在書店で購入できる、または図書館所蔵の可能性が高い、文庫・新書・選書を中心に選定したという。巻末には記念館・研究センター・個人文庫・旧蔵書一覧（該当人物の五十音順、住所と収蔵内容付き）が置かれ、編者だけでなく、各執筆者の簡単なプロフィールも付されている。

個々の思想家やその著書については他の書物やインターネット等で容易に調べられるが、近現代思想の潮流を分かりやすく 5 つの時代に区分し、俯瞰的に見られる入門書は得難い。本書を手取る読者の多くは、個々の思想家の名前は知っ

編者略歴

有木 太一（ありき・ふとし）

1968年生、早稲田大学第二文学部卒。深井人詩氏に師事して、在野の書誌研究者となる。2016年版から中西裕氏のもと『書誌年鑑』の編集に加わり、中西氏勇退後の2018年版から編集作業を引き継いだ。編著書は『書誌年鑑』のほか、『人物書誌索引 2015-2021』（中西氏と共編）、『主題書誌索引 2015-2021』（同）。

「最近の書誌図書関係文献」（日外アソシエーツHP）
毎月連載。



書誌年鑑 2024

2024年12月25日 第1刷発行

編 集 / 有木太一

発 行 者 / 山下浩

発 行 / 日外アソシエーツ株式会社

〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 鈴中ビル大森アネックス

電話 (03)3763-5241 (代表) FAX(03)3764-0845

URL <https://www.nichigai.co.jp/>

電算漢字処理 / 日外アソシエーツ株式会社

印刷・製本 / 株式会社平河工業社

©ARIKI Futoshi 2024

不許複製・禁無断転載

<落丁・乱丁本はお取り替えます>

(中性紙北越淡クリームキンマリ使用)

ISBN978-4-8169-3030-0

Printed in Japan, 2024